



書名  
卷一

~13  
1963  
2



異素六帖序

世之在宇宙者也夥矣陰陽  
 之煦蒸萬殊之區別苦樂渾  
 清情愛逼迫惡可勝言乎放  
 心六合卷悟密室蟻動為牛  
 鳴者聽之牟也蚊足為鬼脛  
 者明之異也若夫知牟異之  
 所以為牟異則豈無牟異歟

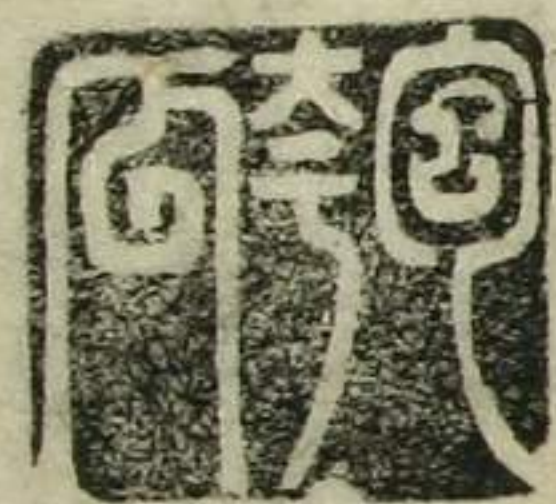


1963  
2

近覽異素六帖太素可以深  
哉深而後為萬々多々之色  
如夫有色則必有想有想則  
樂亦在其中矣二十五有之  
中有北鬱單越又名北俱盧  
洲翻勝處勝東南西之三列  
大樂長壽無憂管弦之絕地  
也事見寶雲經當今謂之北

上之

洲者方語之畧也於爰乎序  
寶曆七丁丑載孟春良辰  
无々道人



六帖

異素六帖序  
 本邦純紙を画院  
 へ給ひては、  
 色を楷籀一たる書は難  
 今出れ、  
 紙、  
 毫の末とふま、  
 抄

上ノ

下  
 優の紙者一  
 葉  
 和漢の情  
 人、  
 将、  
 飽、  
 同

蝸 層 山 氏 齋 自 所  
此のちめしむる日

あつめしむる日

和亭主人



異素六帖 藝例

三川の徑踏ふけりし 筆の客印の  
竈はをん太倉の家と歎き 朱植の  
中を塵核て 山姥の似らさるる  
づき書一かけのそ 摺少木と行な  
つとも 雲は 影り 影の 外あり  
ましつる人 影さる 影と 影 聞

中ねらみけゆりいもあつていそ  
 一いけむるにきりきりいそ  
 中ねのたのこ人何りそ印りは教  
 学共みそ一人は儒者あつん今  
 さら深居のひまかこきあそ  
 つのりいそ流るらつてさつりい  
 ねつとあつていそ  
 事とあつていそ  
 事とあつていそ

吹出さつていそ  
 云移をいそ  
 仏若すいそ  
 街賣如色いそ  
 神りいそ  
 出雲いそ  
 天然のいそ

ぬ浪とく波ありしつらゆめのと正直の  
首よりやうりぬふ神國の操てはこさぬ  
みかつりの悲あもも仏者がいよくあれく  
これの浪氏地治の憂業と皆世を  
れ波のうき揚いゆりてらるでいゆら  
言二人を眼し思入りりうこまやと依りて著  
と難まらにぬのれぬ十やうりぬされ既  
に浪とく波ありしつらゆめのと正直の  
上五六

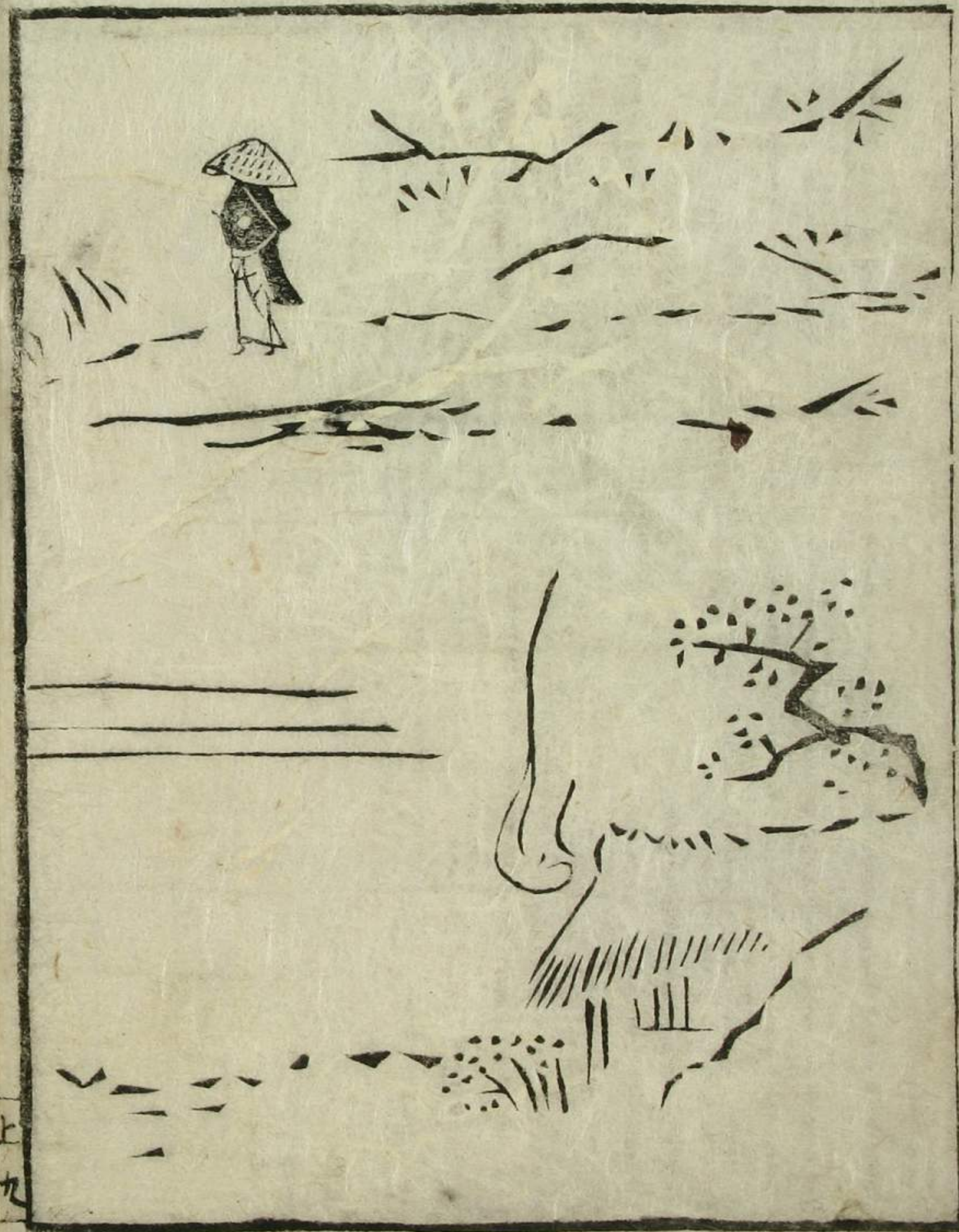
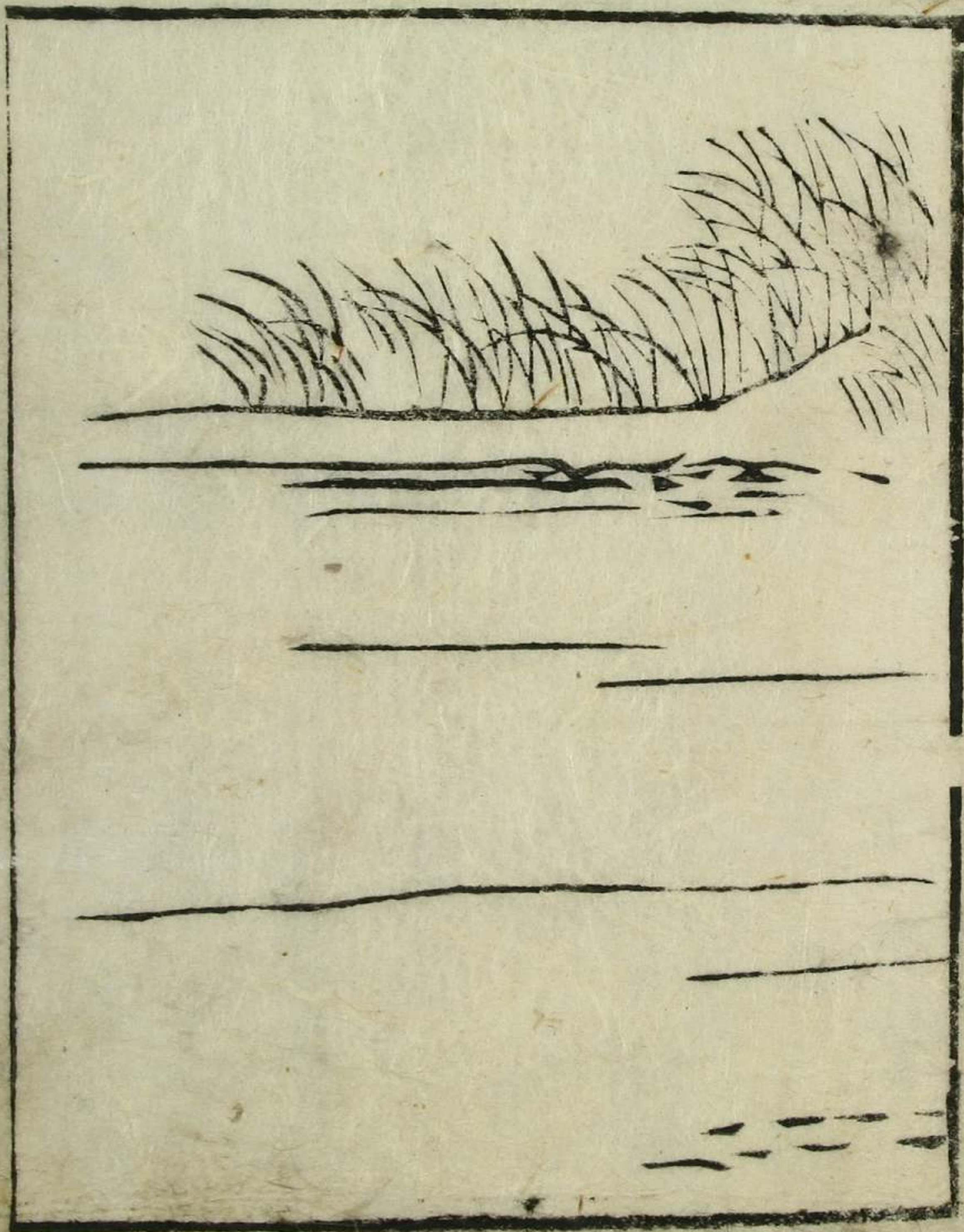
流りされは流生を古あくつして  
浪の徳者よそれ波しと味不入る  
にもの心あひてとさるうらやめとまは  
とぬらふ又若一日若二日若三日乃至七日  
とゆるも皆居續事にてあそむかやうく  
とこふやういやりふとあさるは即ち憂色  
と神心りて仏共おなすより河にて  
とこされ仏共云りらうりらるる

賣色好々々うでいふそはこほぬう心  
 祈念の徳と捨念の徳と一いつて  
 さぬりとたつとさくふらぬいやさそい  
 仏若テまご合点さつしやまぬ  
儒者 儒者又いきて片多をわけて  
 くく  
 此もいかにぬりぬれ既にかさく  
 すりらららけを申とすらぬ  
 施の徳よりなりたるへんらてはま

ぬきしけひさふ事と識すぬは  
 かつきなり小俱度別をさる  
 衆衆一の正色の才とたびけり  
 にかんはつて御まきわらさ  
 だれゆに十に九は北くさる  
 去れし徳あり必方向り  
 のまつきりてわら事とさる  
 てもしかりやうはるし







孝文の揚屋入りとよきやうも一歌しや  
 とてこの事と歌をさるるあてはと歌とて  
 合てみるゝもどふこころあはれ共儒女云は  
 五拾くサア類を抄りまひ終

六帖目錄

その類のよとあら一拾歌  
 其二拾歌々次の巻に果ふ

△孝文の揚屋入

女郎の襖仕内

三月の中は町

書取 女郎

年助のよへ女郎	けんふある女郎
欠落し女郎	指とぬし女郎
ちやる 女郎	ちやるぬ 女郎
心中し女郎	公中とやる女郎
俄客屋の女郎	系性のよへ女郎
性あき 女郎	横に事ある女郎
やを者後地女郎	二西にゆき女郎
二西にゆき女郎	賣りて事ある女郎

親好に初言事	お茶川一女郎
初言独り言事	初言切りの事
しりれ一客	旅一立川客
子言はた言事	酔つたれ一客
ととれ一客	喧嘩費れ客
初言とて言事	戸内とひ一客
堂縁は言れ客	物に成てとて言事
子と言一親心	初れ力

たましく言事	多りの言
素以持言造	月見は言れ物
面白く言事	張敷
船客	熱雪隠
揚屋は言事	
質言事	つら言事
床の言事	辰す言事
床言事	

△ 水とれ家

新家一宮

△ 大門の惣役

大門の番所

吉永れ志

とつまの路をさるるさしに流るおとくに

ふーは秋も圃をて唐詩と百人一首は家

まきけり此時仏菩薩らのよむんまきけり合書して

派に黄金れ肌とまごさの蒲團二つおん

並ぶ流に序一有家の庭をまぢいおみ

御地は迷の庭をまぢいおみ

金れ光るまぢいおみ

おとせまぢいおみ

おとせまぢいおみ

おとせまぢいおみ

おとせまぢいおみ

おとせまぢいおみ

おとせまぢいおみ

異素六帖上の巻

ハ

異素の帖  
百教や舊代に拾遺集  
起如江歌とべし人惜人  
恨乃聖主多流毒れ詠と  
のあは加之唐紅の中將  
多者筒剛仁志孺と怒  
心加古知親の法師は江  
口君り為し大悟と江

たり者足成れ大和言集  
諸哉忠苦野忠雲  
可白雪沖積教文集  
素以味出く唱家妓  
郭忠厚流し江ん  
やと松葉むのの  
友達此時と集の  
琴素六帖と路し卷

六帖

異素六帖

六帖

融の紅の春の日は此の時に  
物の明くんと後に  
事を志す

何遊堂爰歌



六帖五十五段通計

- 一 初三全盛の威をりふより以下乃
- 一 廿二段女郎れう(をりふ)
- 一 廿三より十二段客の事をりふ
- 一 廿五より十一段雜事をりふ
- 一 四十六より五十五まで総論

とあり次

- 一 五十一五十二又客の談笑をりふ
- 一 五十三より五十五まで総論



太夫の揚屋入

紫陌紅塵

拂面来

無人不道

看花回

乙女のことゝ

エリー

こゝろん



紫陌紅塵 乙女唐の太夫此名あり  
志ほくはむまのちとよむ我朝の花紫  
小むままとりあてたま乃通り名とすれ  
るみり紅塵とはおまふれちりーま  
きりりーまはしち史の名とれ我朝よを  
お紫の乙女とてき屋と名附貴ぬこの  
ゆへ素足の人の志とんてりる  
心せりとし

六ノ中

女郎の被の肉

冷艶レイエン全歌ゼンカ雪ユキ

餘香ヨウカウ乍入シヤイリ衣イ

けふ九きり小ほひめらる那

冷艶レイエンとハけりくやさくしらまき

あふ心たゞ云ちくそまきまき

肌ハダの香カウ此ココ知チ得トク乃ノかほりカホリ程ほどさきに

いふへまきくさる

三月妓中の町

名花メイカ傾カウ國クニ兩相リウサウ歡カン

かひ乃かすこきと次もあらん

名花メイカ傾カウ玉タマ武ブ説セいもくともかとかつらとま

黄令ワウレイ鼻ハナ張カウのそとらふ又マタ能ノは此ココ傾カウ傾カウ動ドウ

の傾カウいあすとい今日コンゴいつれもあしき

女席メザシと橋ハシとたまたのむとまへ

六占

日

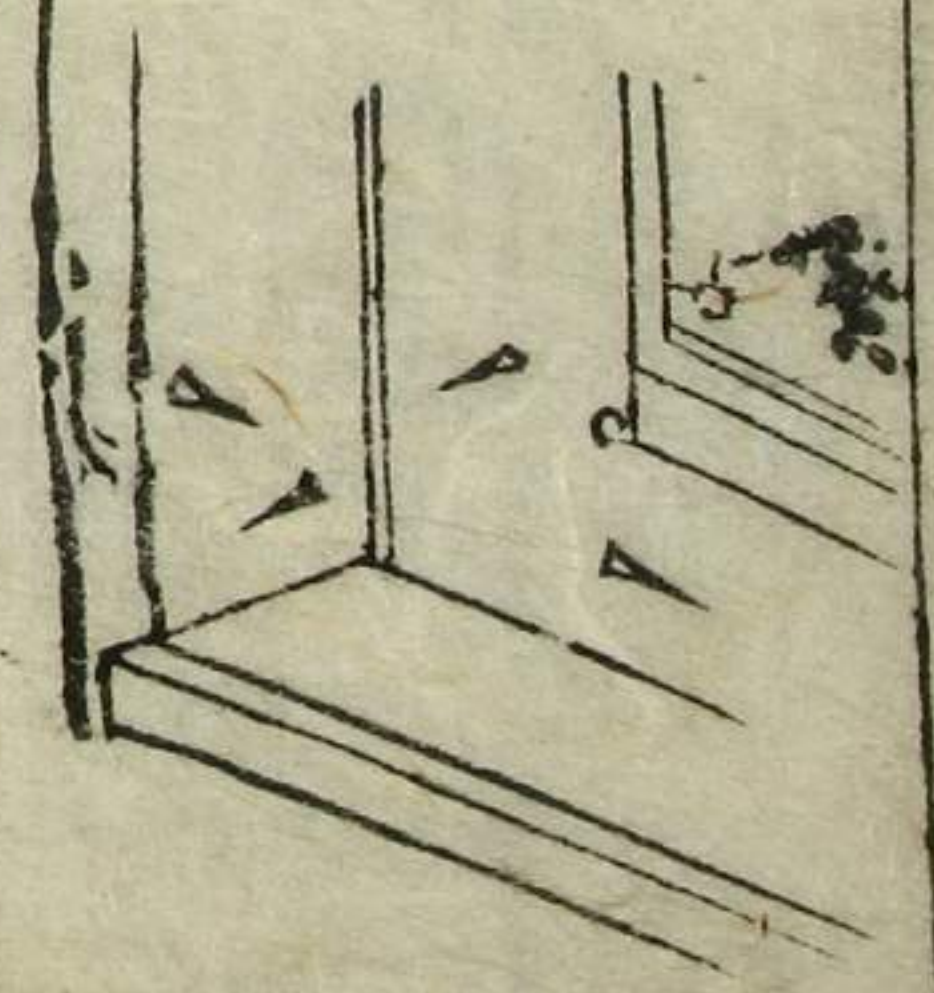
ごんきう女席

年光<sup>チニクダ</sup>到處<sup>イタトコロ</sup>

皆堪賞<sup>ミナタガリニヤウ</sup>

、私身世ふあら

けうめせー酒



年光<sup>シニクダ</sup>はごうけー女席<sup>メシ</sup>はもろ口<sup>クチ</sup>乃

蔭<sup>カゲ</sup>くをけてひろる男子<sup>オトコ</sup>あれをわすはの光る

ころいごうけーカ<sup>カ</sup>らいひる

あるをりよかやう<sup>カヤウ</sup>年<sup>トシ</sup>ごうけー

女席<sup>メシ</sup>乃<sup>ノ</sup>摺別<sup>スリワケ</sup>なり

みる人感<sup>ヒトカニ</sup>ぢ

とな祭

朝の近い女帝

紅粉樓中

應計日

おとくハ

久一

一

おののあき日とさひわううまくとし  
けし事なり

いとぬる女帝

白眼看

他世上人

あり

なり

のハ

我ハ

白眼ハみよむ之又糸目之床板平  
ありアアありあり目前のや  
なり詩を多情あり

欠片——うら女帝

返照入問巷

憂来誰

共語

あたるそ

け世紙

すこ——てよ

とや

返照此照ハ生ハ一生と過去一久——  
別世界の住居なるを以て此世の意味  
此問巷ハ所乃裏屋ニ  
ありて世勤と止て客よあもて世を渡り

心切——女帝

憑漆雨行涙

寄向故園流

たうれとあへぬのみちのり夢ア

憑ハ心切をうらりし心よらるる女眼より  
涙とあ——く故園ハ小橋とほもて血を  
小えんかき出る流——まらふ

時花女帝

春潮

夜々

深

人をもさるぬ

か

か

春潮はうーはし夕時乃ますと  
三結とむくとと夕のま  
いぐとがさるへさくいはるがら

さやめ女帝

客舎平居

絶送迎

つうゆむの乃秋よはのうぬ

客舎ハ女帝居なり  
栗原ハ足せ

けりおてさるるさるる心くも

さるる

心中と一、女帝

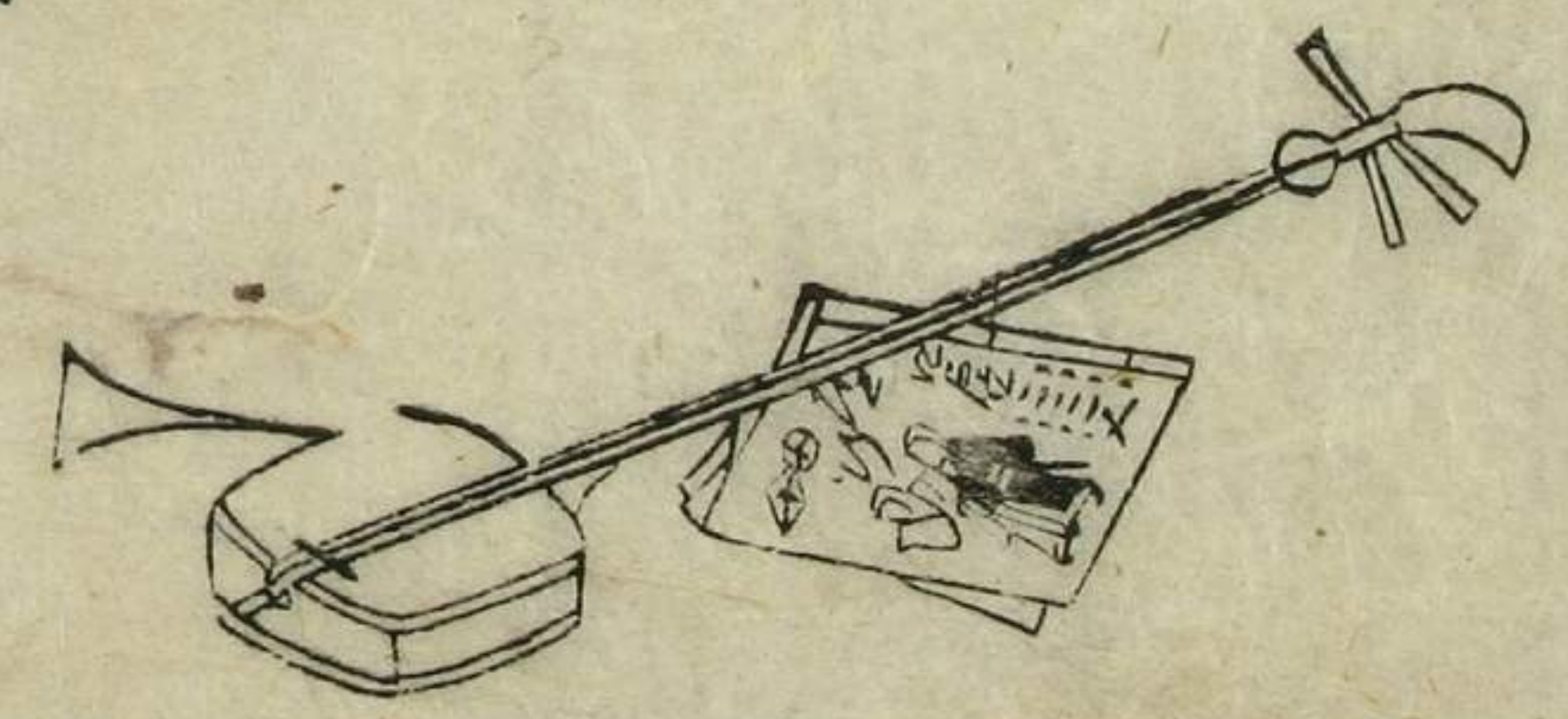
縦死タテシ

猶聞ナラヒ

狭骨ヒナボネ

香カウキ

名こそたうふくかといひこそぞ



狭骨とけ世里の聲澄らしてたふハ  
又その声よそユハ スキンセンニヨ ナミと  
ミヤウ、ウミ、ウミ、ミヤウ、ミヤウ、ミヤウ、  
ミヤウの音かきうしのこる ことと李  
名に似たりて うれかハれとナリ  
なうれ乃力ましく 又名まておる  
ことと李

六帖

口中とイヤる女席

我心渺無際

河上空徘徊

人のい乃ちれば行くもそくぬ

渺としてとハ屏風のぬちよある鏡のるく

くよあまをちあハるくよハあけそく一き

あまをとりよ河上ハ川者と通とかくのそく

はるあま女席ハ川岸へあてをいさくハま

俄一客のつらと女席

空山不見人

但聞人語響

あがりてたよの人乃こじりさ

空山ハ吟詠にをくはゆるさんて

あまをとりよ河上ハ川者と通とかくのそく

あまをとりよ河上ハ川者と通とかくのそく

あまをとりよ河上ハ川者と通とかくのそく

六帖



六帖

素娥のよみ女帝

美人 天上落

あまのくちぢぢん

なまはぢぢぢぢ

て上より落とハせのう一人ともよひて

こらよま一人乃いやーさつあすあぢぢぢ

とよ或後てて上より落るとハ行き女れ

腰めけねいといと難するこらとさ

性あまの女帝

澗水東流復向西

身乃いさけぢぢ

素里想つぢぢ

澗ハ向く男夫のまゝ水ハ舞く男夫すぢぢ

乃乃登るぢぢハあぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

とよ東流とハ流れの身のいぢぢぢぢぢ

あやぢぢ西の人ともぢぢぢぢぢぢ

六帖

上

六帖

横トある女帝

相見兩不厭

まのしりまは

今か池りふ

友不厭やうふいんと、あさうまをにらめたるれ

けうとくあさう武説いとはよ云不厭を助のを

けうとくこのけ説さまうさずさきき色

なれん

いやさ密ようけり如如

只有此山中

雲深不知處

まうまゆれゆととままううの

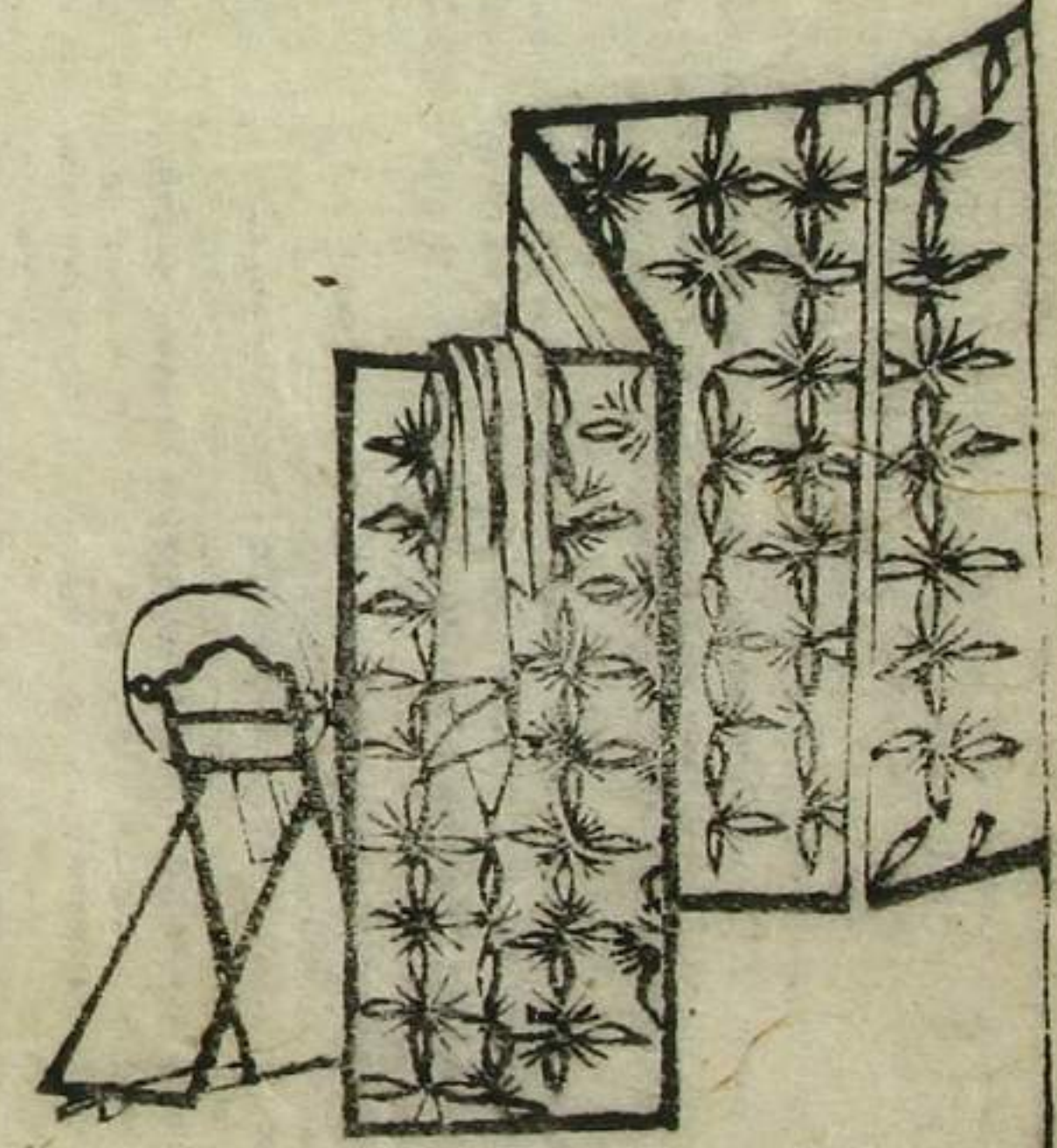
雲深しんててととハハいいももおお有有頂頂天天之之

下晴雲しん西復しんとといいううことことくく

くめんの

おまめ

女席



妻心正断絶

君懐那得知

ものやにゆくと人乃とよまき

妻とハ女の自新れ酒くろの切と考工  
 言字聖帝色とあの人ト懸と考と  
 一よよ女とんろと酒工志と考を  
 踊志と考と考くとのあふと考と考自  
 今のと考と考ひとつと考と考と考  
 女乃通新と考の君を懐とハ考と考  
 一よよの考れくめんあく考と考  
 と考の考一と考と考と考と考

三  
中

くめんのあはれさ女帝

但見涙痕湿  
不知心恨誰

人とも身ともさうさうみちるる

涙痕はうみのなうら目とるるは  
とよあはびやうなんそなくとひ

責くわて

ある女帝

故郷今夜  
思千里

家とる

せめ

今なきを



六  
右

十四

親のよめははる女帝

獨在異郷為異客  
每逢佳節倍思親

うづるまきぬきあはれ

異つゝあまの異ハ花里通高孝云 風俗

地女園入矣ありとりよ

佳節ハ紋のなりよめ

里をかゆひかあ

水糸挽女帝

彈琴復長嘯

なぐく一夜と

ひらぐと祓年



肅とハ瘧の皮とむくとりよる我う

いまは謀のうそとつとじらるあめ

際りる肉うそのうらえをむきて

うせとこがさすこころ

初々ハツハツと云トうくクんンとト客キヤク

吳ゴ姬キ緩クワン舞マシ留リウ君キミ醉シ

今イマ一イツひヒのみノゆユさサまマなナん

吳ゴ姬キはハうウつツくクさサかカしシ吳ゴハハおオめメ初ハツとト美ミ媛メ  
とト吳ゴ服フクとトいイ若ニギハヤヒ竹タケとト吳ゴ牛ウシとトいイ食シ  
食シよヨゆユとト吳ゴ器キとトいイうウもモ

初々切ハツハツキのノまマ

羽ウ客キヤク室シツ歌カ此コノ地チ遠トホシ  
離リ筵エ敷シ處トコロ白シロ雲クモ飛トビ

りリ来キもモ一イツもモあアまマ乃ノ送ソウらラむム

羽ウ客キヤクハハちチのノひヒがガまマをヲてテどトびビあアりリくクまマくク  
あアるルまマよヨよヨつツてテうウてテハハ禰ニ胖ハツのノ翅ツバをヲしシらラとトよヨ  
そソくクひヒたタらラ



六中  
よくゆゑにふりぬる客

遮莫

鄰雞

下五更

あつまげり

うきもの

舞



酔つゝあはれ

酔卧沙場君莫笑

莫多飲るめし

われなぐりぬる

沙場ハ沙利場入君ハつれとて

よ





のふねい表

聞中只是

空相憶



ころもくくく 此独も神む

園を移やく其ハ玉とよむ字なり門の  
うらよ玉あらかちのんごよへー

唯購買の客

獨自狂夫不懐家

人よきく種くをらうしもの風

程夫ハ競たりきよひ男ハ獨とハ音ぞ  
毒と遊次人のぞくかれをありひくうと  
訓ずる人乃非とを雨ゆると  
解

東屋とこつる客

送君還舊府

明月滿前川

送君還舊府

君ハ女帝ノ旧府ハ

新來ノ府ハ夫ノ妻ヲ送テ旧夫

とわつるとか

戸まじひし多客

舉頭望山月

低頭思故郷

雲乃いほこ平月やとら

舉頭ハ仰ナリ低頭ハ伏ルリ戸惑

し小使ノ者小使スルとささ翁乃

雨作あり人送の考りりこの情

工文とて

空 縁法界の家

今夜

不知

何處

病

おし

おし

人

おし



おし

いざれ

何處

人

おし

おし

秋風至

おし

秋風至をかゝりて  
らんなどよみか  
とすつらとて  
おし

子と賣—親心

愁聽寒蟬淚濕衣

我夜のそ

涼よわれの

秋葉ハ三つぐまをしけり—養子

や—かきそののゆその考とまを我

子乃歌入—たけり—はかぬが

あり

つとめれがハ

相逢

まるそ

相値

まらぬ後

且銜杯

急坂の突

且銜杯とハさうつまをかくむはあり

その一二といそくきつとやせう—づく

ワ千ハタハヤセン オトリアゲナシなとよ

彩骨 199

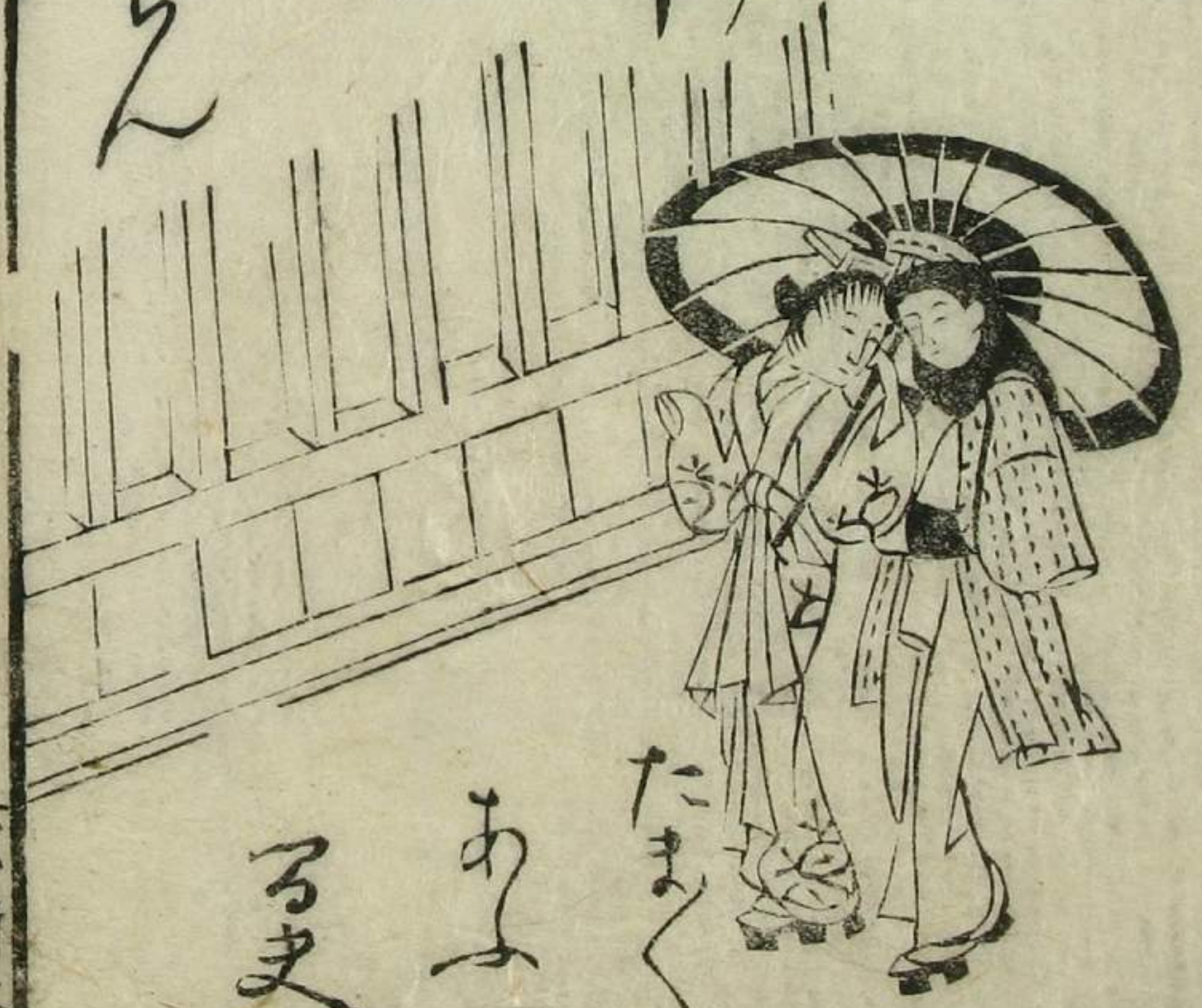
知<sup>シラテスルコトヲ</sup>有<sup>コト</sup>前<sup>マエ</sup>期<sup>キ</sup>在<sup>ル</sup>

難<sup>カタシ</sup>分<sup>ビ</sup>

此<sup>コノ</sup>夜<sup>ヤ</sup>中<sup>チウ</sup>

夢<sup>ユメ</sup>の通<sup>トウ</sup>路<sup>ロ</sup>

人<sup>ヒト</sup>のよ<sup>ヨ</sup>くら<sup>クラ</sup>ん



た<sup>タ</sup>ま<sup>マ</sup>く  
あ<sup>ア</sup>ま<sup>マ</sup>  
る<sup>ル</sup>ま<sup>マ</sup>

あ<sup>ア</sup>の<sup>ノ</sup>り<sup>リ</sup>乃<sup>ノ</sup>

禿<sup>カド</sup>

莫<sup>ナシ</sup>令<sup>シテ</sup>長<sup>チウ</sup>袖<sup>シュウ</sup>倚<sup>ヨリ</sup>欄<sup>ラン</sup>干<sup>カン</sup>

け<sup>ケ</sup>や<sup>ヤ</sup>神<sup>カミ</sup>の

あ<sup>ア</sup>の<sup>ノ</sup>り<sup>リ</sup>乃<sup>ノ</sup>に<sup>ニ</sup>ま<sup>マ</sup>り<sup>リ</sup>我<sup>ガ</sup>



前朝ぜんとハ古注こちうニヤクモ契約けいやくナキト  
今考いまる小朝せうの字蓋起はげの字ま知ちらん丸  
前まへ起おこるるなるる一一此この意いももくくアアるるととままハ  
次つぎのの句くとののつつううううつつる

長神ちやうじんハハかりかりそそででくく長子ちやうしののめめ、、ざざくくすると  
すすててかりかりららよよるる初はつめめ孫まごニニららんんららんん  
ううけけーーややらんらんんんニニ神かみととううけけーー又また延の出でし  
ららももししよよ義ぎつつららず

たいたいここニニ揚あつつるる新造しんぞう

閨中けいぢゆう少婦せうふ

不知しらず愁しゆう

あまのけしき

あまのけしき

室中むろぢゆうハハままニニ注ちゆうするるととくく少婦せうふをを  
立たんんぞぞううととりりよよ

いいままののけけーーああままとといい見みしし新造しんぞうここ  
松まつ子こららんん（（ああままとといい見みしし新造しんぞう））ととりりよよ

月見の甚れ物

一時回首月中看

三笠の心平

初一月の夜

回首とハ中の所の方こそくびと回せば  
月のまゝ夜ふありかへゆく庭邊に  
又月れ甚れあらく

面白く遊本

總向春園裡  
花間笑語聲

なみ〜〜〜地あきほけれ

春園裏とハ花と對するがごとく室中を以  
花のちもいふもいふもく菱合鼻紙より  
よめもよめも時ハ室中賑しく〜〜や  
ゆ〜〜心なる口をを理よ〜〜はるたおと云

夜番ヨバン

旅館リョウイン寒カン燈トウ獨ヒトリ不眠ズミ

何ナニと云イハれル也ナリ云イハるナリ

藤フジ飯イリハシとシよク少シ多ク也ナリ乃ハとシ云イハるナリ



舟フネやど

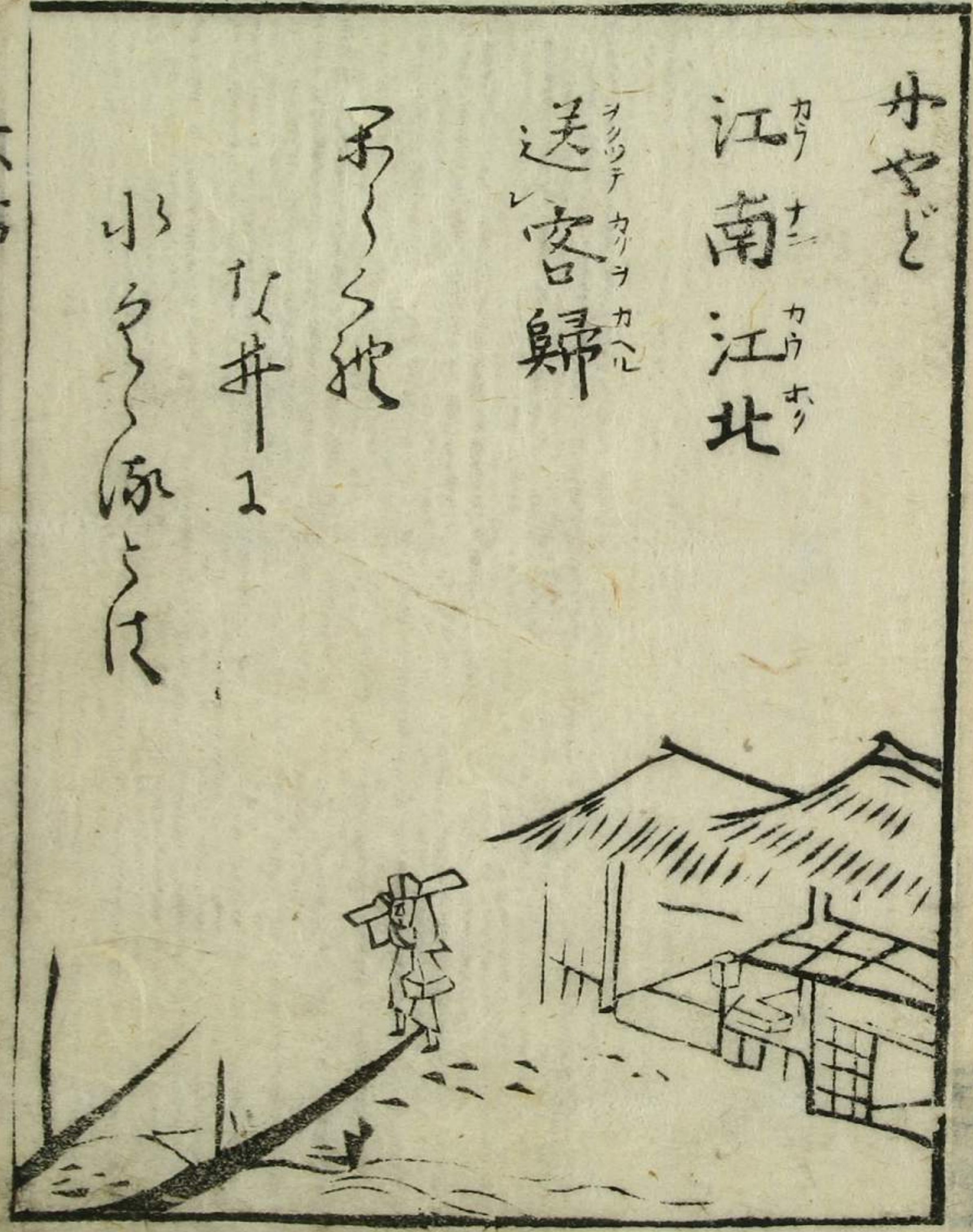
江南カウナン江北カウホク

送客オクツテ歸カケル

舟フネとシ也ナリ

井イノイ

水ミヅとシ也ナリ





忠孝源

黄河入海流

こいろつともきて潮とあうらる

黄河とよまいろの水のなりうく川あり

肛門関乃きしよりあられも冀州

入と漢書地理志よんくう

漢音 冀州

揚眉の依眉池

積雪浮雲端

又こ乃言る上巻ハありけ

積雪ハ紙のおほくて白きかちなり

園中しふふあしくんんくし

うらふ陰陽のあたる人ちさ味ありあ

滑るれは積雪とあ



客心争日月

床乃よの女帝

たうくしうれと思ひぬらふ

争日月とい日数月数揚づめ

よせんと客とふあきまなり



居すゆひのよの女帝

峯看山月

半輪

秋

客

月乃

争

客心

床で骨と打し女席

孤城遙望玉門關

黃沙百戰穿金甲

みよめくきけ物とては思

孤城二戦之の城之黄沙ハ功若と云

通也穿金甲ハ軍士甲冑と帯

冥中と修しんとて時と云

戦よる孤老ハ

下十九

水との雲

此夜断腸

人不见

ワ種

まき傍

いんふんふおのぬ

既物と云ふかけぶいもるをい

人不見はあれおろ人ハ既物を

見ぬしつめとりふなり

六古

新築の一室

春光

不度

玉門関

忍ぶるもの

ふりり

ゆきす

春光は春のどきまにのどきうらや  
よきいぢふなぐぬしくふ夜と  
いふれあへ

大門の櫓

いふハ

きまへ

雙掛

日月照

乾坤

ゆとこもわぬ

乾坤とハ二階と下



あつた勢不

為問門前客

今朝幾回来

幾束祐さめぬす乃乃至

幾箇束の箇ハ駕と遊む或いそ  
そ何くと駕をたむい門前  
はつまるをんさ家さぬし

吉原ハ志實

黄金不多

交不深

や乃乃行く

うま

一のやうなうくお京



宝

寶曆七丁丑歲正月吉日

書林

東都淺草御藏前茅町二丁目

本棧本町四丁目

六河亦次郎板

柴田彌兵衛全

